

「守られた命」 被爆体験を次世代へ



草加市在住
つちだ かずみ
土田 和美さん

道路の上に炎が

私が生まれたのは1940（昭和15）年8月9日ですので、広島に原爆が落とされたとき、4歳11カ月でした。両親と

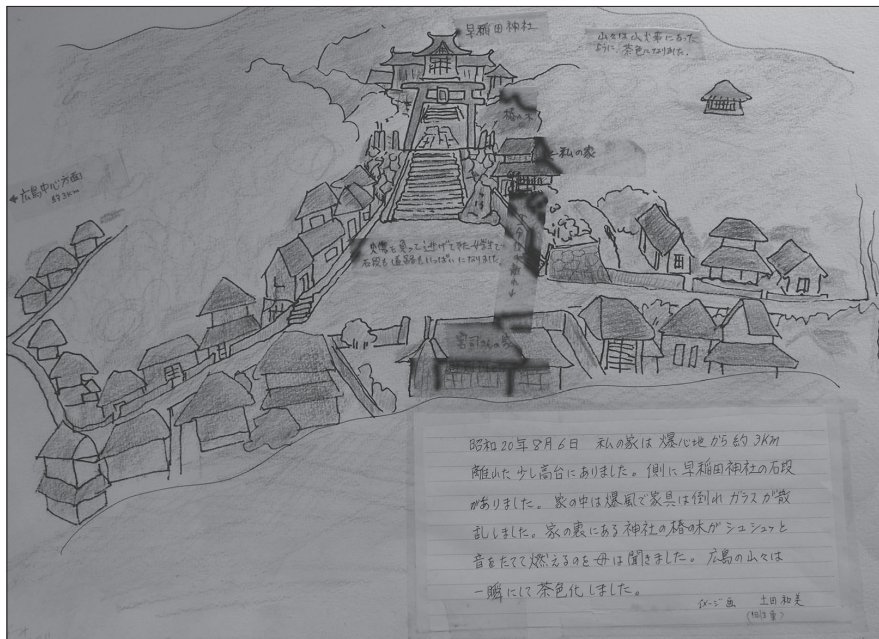
弟が2人、生後6カ月の妹の6人家族で、爆心地から約3キロメートル離れた場所に住んでいました。

8月6日の朝、空襲警報が解除された頃に友だちの「はあちゃん」が遊びに来ました。はあちゃんは2歳上の男の子です。母に「配給の牛乳を取りにいってきて」と頼まれました。妹のための牛乳です。

プロフィール 2012年9月、ピースボート被爆者派遣団として非核特使の委嘱を受け、中東イスラエルで核廃絶と平和を訴えた。日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の要請で、ワシントンD.C.にて証言するなど、幅広い人たちに向け証言活動を行っている。

はあちゃんと2人で牛乳を取りに行った帰りにバス通りを歩いているときに被爆しました。音や光は覚えていません。爆風で飛ばされたのかどうかもわかりません。気がついたのは、泣きながら立ち上がる時でした。バス通りなので、道路の上にはなにもないはずなのに、もうもうとした黒い煙の中に炎がポツポツとあがったのを覚えています。「なにかが起きたんだ」ということはわかりました。はあちゃんといっしょに、どこの家でもいいから助けてもらおうとしましたが、どの家も門や玄関が壊れていて、とても助けてもらえるような雰囲気ではないことを、子ども心に感じました。はあちゃんは歯をくいしばって、肩が震えているように見えました。私はそれを見て「どうした

んだろう」と思いました。2人でバスの
終点まで来ましたが、はあちゃんはそのこ



爆心地から約3 km離れた場所にあった土田さんの自宅周辺の様子。早稲田神社の石段のすぐそばに自宅があり、石段を降りたところに宮司さんの家がありました（イラスト：土田さん）

から自分の家のほうへ走っていきました。置き去りにされてしまったような、淋しい気持ちになったのを覚えています。私は家に帰る途中の道にいた男性に「おじさん、連れて行って」と頼み、早稲田神社の宮司さんの家まで連れて行ってもらったところで、母が待っていました。原爆が落とされてから、どのくらいの時間があつたのかはわかりません。

母は家の台所で被爆しました。家の裏にあった椿の木の葉っぱがシユシユシユッと音をたてて一気に燃える音がしたと、母の手記には書いてあります。家の中は足の踏み場もない状態でしたが、弟2人は無事でした。妹はタンスの下敷きになつてしまい、母1人では助け出すことができませんでした。外の通りを歩く逃げてきた人たちに「助けてください、赤ちゃんがタンスの下敷きになっています」と声をかけ、手伝ってくれた女性と2人で妹を助け出したそうです。妹は窒息状態でしたが、足を持って逆さにしたところで息を吹き返しました。父は爆心地から約1・5キロメートルの場所に友人の医者をつたねていったところで被爆しました。家屋の下敷きになりましたが、自力で抜け出して帰ってきました。ガラス

が刺さって真っ黒になり、血だらけの頭にはゲートルを巻いていました。母が父の背中のガラスを取ってあげていたのを覚えています。父は9月11日に亡くなりました。

はあちゃんは引越しをすることになりました。お母さんがあいさつに来られたときに、はあちゃんは右の首に火傷をしたことを母に話したそうです。

被爆体験を 伝えなければ

私はずっと母の介護をしていましたので、被爆者としての活動はしていませんでしたし、したいと思ったこともありませんでした。被爆者の話を聞きたいと思ったこともありませんでした。父が亡くなったあと母子寮に入り、働いても働いてもどうにもならない状況で、生きるのに精一杯だった母や自分たちも大変だと思っていたからです。

2007（平成19）年に、13年間介護をした母を看取りました。翌年、ピースボートに乗る機会がありました。夫が「行

「つてくれれば」と言ってくれたこともあり、乗ることにしました。そのとき、104人の被爆者が招待されていました。

船で参加者と交流するなかで、私が被爆した場所の近くにある安楽寺で被爆した男性の証言を聞きました。その男性は、被爆当時は3歳くらい。安楽寺の大きなイチョウの木の下で遊んでいたところで被爆し、木の影になっていたところは火傷しなかったけれども、ほかの場所は火傷してしまいました。この火傷が原因で、結納まで済んでいた結婚が破談になってしまったのです。私は大変なショックを受けました。当時の彼の気持ちを想像すると、胸が痛くなりました。この証言を聞いて、「世界中の人にもう2度とこんな思いをさせてはいけない」「被爆体験を伝えていかなければいけない」と思うようになりました。

はあちゃんとの再会

埼玉に戻り、しらさぎ会などで証言活動をしているうちに、NHKの「ヒバク

シャからの手紙」という企画を知り、「これに応募してみよう」と思いました。安楽寺で被爆した男性の証言を聞いたときに、「はあちゃんが首に重い火傷を負ったのはどうしてなんだろう」と思ったんです。自分は火傷をしなかったけど、はあちゃんが火傷をしたのはどうしてなんだろう。はあちゃんに呼びかけをするような手紙を書きました。手紙は採用され、テレビで放送されました。

昨年、NHKから「この手紙を高校生に読んでもらいたいのですが、よろしいでしょうか」という連絡がありました。NHKからは、この企画に関連して「広島に來れませんか」という打診もありました。そこで、新型コロナウイルスが少し落ち着いていた昨年7月、広島を訪れ、NHKのアナウンサーの方や手紙を読む高校生たちを早稲田神社やその周辺を案内しました。その帰り道、車の中でアナウンサーの方が「早稲田神社の宮司さんが、『この辺に住んでいた東さんという人を探している人がいる』といていた」というのです。東というのは、私の実家の名字です。そこで、宮司さんと連絡をとって、私を探しているといっていた人の名刺を見せてもらおうと、それははあちゃんの名

刺でした。私ははあちゃんの名前を「マサキのはあちゃん」としか覚えておらず、フルネームや漢字は知りませんでした。が、名刺の名字を見て、はあちゃんだとわかりました。はあちゃんは長崎で住職をしていました。宗教者の交流のなかで、早稲田神社の宮司さんが偶然、はあちゃんに声をかけられたそうです。そこで早稲田神社の近くで被爆したことや、そのときいっしょにいた人を探しているという話になったことを聞きました。

広島に來たときにはまさかこんなことになるとは思わず、埼玉に戻ってからすぐに手紙を書いて出しました。すると、手紙を読んだのはあちゃんから電話がかかってきました。「とにかく私は被爆したときのことをなにも覚えていないので、なぜ無傷だったのかということが知りたかった」ということをいちばんに伝えました。はあちゃんはあのとき、反射的に私に覆いかぶさってくれたのだそうです。はあちゃんは両ひざの裏に大火傷を負いました。少年期には、ずっと正座もできなかったそうです。これは想像もしていませんでした。感謝の気持ちと同時に、私は守られたんだといううれしい気持ちにもなりました。道路に炎がポツポツ

[illegible]

上・はあちゃんといっしょに牛乳を取りに行った帰りに被爆したバス通り　下・被爆して気を失い、泣きながら立ち上がると、道の上に炎が見えました（イラスト・土田さん）

被爆体験を証言するということは、とてもつらいことです。私は、最初のうちはなにを話していいかわかりませんでした。戦争のことや原爆のことを学んでいくうちに、当時まだ小さく、ほとんどそのときの記憶がない私が、被爆した人たちや亡くなった人たちの悲しみや痛みを全部引き受けて話すということは、とても抱えきれないと思うこともあります。でも、75年目に被爆したときにいっしょにいた友だちと再会して、自分は守られた命だったと知ったという私の体験も、被爆体験のひとつです。これを伝えていきたいらと思うています。

私は自分の被爆体験をなにかに残したいと思い、お芝居にすることにしました。9月に草加市で、俳優の暁つきさんによる一人芝居「はあちゃんへの手紙」が上演されます。私の体験を次の世代へつなげてくれる人ができて、ほっとしているところです。